

試料・情報利用研究計画書(概要)					
研究番号	2024-1035	利用形態	共同研究		
研究題目	母親・父親のうつ・ボンディング障害に関連する要因の検討		研究期間	2024年11月 ～ 2026年3月	
主たる研究機関	東京大学		責任者氏名・職	西 大輔	教授
分担研究機関	東北大学東北メディカル・メガバンク機構		責任者氏名・職	栗山 進一	教授
分担研究機関	東北大学大学院医学系研究科		責任者氏名・職	寶澤 篤	教授
研究目的と意義	本研究は、母親・父親のうつ・ボンディング障害に関連する要因を明らかにすることを目的としています。				
研究計画概要	東北メディカル・メガバンク計画「三世代コホート調査」に参加された妊婦、パートナー、祖父母、兄弟、出生児の調査票データを活用し、以下の曝露要因とアウトカムであるうつ(EPDS、CES-D、K6)とボンディング障害(MIBS)との関連を調べます。 1. 母親と父親を対象に、各不妊治療(一般不妊治療、体外受精、顕微授精)が自然妊娠に比べて産前・産後のうつ・ボンディング障害の発症に影響を与えるか、さらにその予測因子について、複数時点・年単位のデータを用いて調査した質の高い研究はなく、詳細な情報かつ大規模集団において関連を検討します。 2. 母親・父親を対象に、つわりの重症度が、産前・産後のうつ・ボンディング障害の発症に影響を与えるか、さらにその予測因子について、複数時点・年単位のデータを用いて調査した研究は産後うつに関する小規模研究のみであり、関連を検討します。 3. 母親・父親を対象に、ある年齢時点でのこどもの睡眠パターン(夜間覚醒の頻度や昼夜逆転など)やこどもの発達特性(ASQ-3)が、産前産後のうつ・ボンディング障害の推移に与える影響について、縦断的に検討します。 4. 母親・父親を対象に、同居家族の構成(同居実祖父母・義理祖父母の有無、兄弟の有無、片親家庭など)とその家族構成の変化が、産前産後のうつ・ボンディング障害に与える影響について、縦断的に検討します。 5. 母親のASD症状(AQ-10)が、産後のうつ・ボンディング障害に与える長期的な影響について、産後の任意の時点(生後1ヶ月、6ヶ月、1年、3年、5年等)ごとの、うつやボンディング障害の違いを検討します。 6. 子どもの情緒・行動問題(CBCL: Child Behavior Checklist, TABS: Tokyo Autistic Behavior Scale)と親のうつ傾向の推移との関連を各種要因(労働時間、保育時間、児のスクリーンタイム、祖父母の要因、医療機関受診など)を考慮の上、縦断的に検討します。				
利用試料・情報	対象:三世代コホート調査に参加された妊婦、パートナー、祖父母、兄弟、出生児(約7万人) 試料:なし 情報:調査票回答(6歳時まで)、診療録転記(母児)、基本情報				
期待される成果	母親・父親のうつ・ボンディング障害は児童虐待、子どもの発達の遅れにも関連する非常に重要なアウトカムで、本研究結果は臨床実践および公衆衛生施策の発展に有益であると考えます。				
倫理審査等の経過	2024年11月 東京大学医学部倫理委員会				
倫理面、セキュリティー面の配慮	研究参加者からご提供いただいた情報は、氏名、生年月日等の個人情報と容易に結びつけられない策を行い、厳重に保管します。提供いただいた情報などをもとにした研究結果が公表されることがありますが、研究については集団として解析を行うため、研究参加者個人が特定される恐れはありません。				
その他特記事項	この研究は国立研究開発法人日本医療研究開発機構医療研究開発推進事業費補助金、東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野運営費、および東北メディカル・メガバンク事業補助金により実施します。				
(事務局使用欄)	*公開日 2024年12月20日				